

続・ 珈琲の思い出十四

「それならお茶でもいいかがですか？」

和樹にそう聞かれて私は即答した。

「は、はい!!ぜひお願いします!あの、上司にちょっと話をしてからすぐに行きますので、先に行つてもらえますか?」

「それなら、その駅ビルのスタバでもいいですか?」

「わかりました!10分以内に参りますので必ず待つていて下さいね!」

それから私はやりかけていた仕事を大急ぎで終わらせ、

店長に今日の業務の報告と、今日はこれで失礼することを告げると、大慌てで着替えて、化粧と髪型を簡単に整えた。

早く、早く行かなきゃ、和樹は帰つてしまうかも知れない。

店を出て、横断歩道の信号待ちをしているとき、自分の手が震えていることに気づいた。

なにも仕事帰りに男性とコーヒーを飲みに行くぐらいなんということはない。今までだつて取引先の営業マンと二人きりで食事に行ったことも何度もある。

なのに、なぜ、こんなに後ろめたい気がするのか、なぜこんなに手が震えているのか……。

待ち合わせのスタバまで走りに走った。多分私の足は地面から2、30センチは宙に浮かんでいただろう。

店に入ると、入り口正面のボックス席に和樹がニコニコしながら座っていた。普段お話会の時に会うときにはいつもジーンズにトレーナーのようなラフな格好なのだが、今日はダークグレーのスーツに、ブルーのネクタイ姿が似合っている。

「か、かつこいい……」私は胸がキュンキュンなった。(続く)